
世界で一番、優しい魔人

まいるど せぶん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界で一番、優しい魔人

【Nコード】

N2351BA

【作者名】

まいるど せぶん

【あらすじ】

倫理感の欠如した『冷酷な』少年、暮井雄は、ある日一冊の魔導書を見つける。

ものは試しと、そこに記された召喚術を試してみた雄は、儀式の手順を間違え、逆に自分が異世界へ召喚されることになった。

召喚の魔方阵を通ったことで、悪魔の力を得た雄は、魔人と呼ばれる存在になり、暴れまくる。

しかし、悪の象徴であるはずの魔人の中では、現代日本という環境で育った雄は、断トツで人間に優しかった。

優しくない少年は、なぜか『優しい魔人』として名声を得ることになる。

序幕

幼い時分より、よく「人としての倫理観が欠如している」と評されたものだった。

要するに俺様は、優しさというやつを他の人間とは違った次元でしか持ち合わせていないらしい。

もちろん、理屈の上では理解できる。悪口を言えば傷つく。傷つくのは嫌だ。だからダメだ。そんなことは、嫌というほど教わった。だから、理性的に生きる限りにおいては、俺様とて大きな問題は起こしていない。

虫くらいなら迷わず殺すが、どうせゴキブリなんぞいくら殺そうが、誰も俺様を恨まないだろう。

「……………あん？　なんだこれ」

そんな俺様だが、家はヤクザでも何でもなく、それどころか由緒正しいお金持ち。

なんとなく一ー本当に、何の意図もなく、家の倉庫を漁っていると、革の表紙で設えられた、古くさい本が目をついた。

「これ……………もしかして、人間の皮膚を加工してんのかあ？　いくら何でも、俺様でもこれは趣味が悪いと思うが……………こんなもんを保管してるとは、親父も俺様を説教できる義理はないな」

表紙に文字はない。出版物ではなさそうだ。

とりあえずパラパラとページを捲っていると、どうも外国語で書かれたものらしく、文字は読めなかった。

読めないどころか、上下すらわかんねえ。

仕方なく、放り投げようとしたところで、挟まっていたらしいメ

モ用紙がはらりと舞い落ちる。

傷んだ髪だが、こちらは手書きの英語で走り書きされており、多少は読み解くことができた。

「なになに……召喚術？ 騎士……悪魔……エリゴール？」

要約すると。

この本は召喚術について記された魔導書で、このメモに書いてある儀式を行うと魔術が行使できるらしい。呼び出せるのは、エリゴールとかいうどこぞのティッシュのような名前をした、騎士の姿の悪魔。

実のところ、俺様はオカルトの類いは嫌いではない。

むしろ、圧倒的な未知の力で人を蹂躪してみたい。

だから。

暇潰しに、ここに書いてある内容を訳して、エリゴールとやらを召喚してみようと思った。

メモが挟まっていたページに描かれた魔方陣。図解を見る限り、へビの血を使って描くらしい。

「ま、人生何事もチャレンジだよな」

たぶん、社会的にはチャレンジしてはならない方向性なのだろうが。

俺様は、とりあえずへビをどこで盗み出すかを考えることにした。

——このとき、俺様は知らない。

わけのわからぬ外国語に苦戦した結果、儀式の手順を間違え。

エリゴールではなく、俺様自身が召喚の魔方陣を通り抜けてしま
うことを。

1・魔人誕生

どうしてこうなったのか。

黒光りする甲冑を纏い、手には長い槍を握っている。

あの本で見た、エリゴールの挿し絵。そのままの姿だった。

と言っても、池の水面を見る限り、強面な顔と燃えるような赤毛は、元の俺様のままのようであったが。

「……どうせ挿し絵の再現すんなら、馬もセツトで付けやがれっこの」

よくわからない方向性にキレながら、俺様――暮井雄くれいゆうは池に小石を投げた。

「うおっ」

しかし、力任せに投げた小石は、凄まじい勢いで水面を突き抜け、底まで届くと、水を吹っ飛ばしてクレーターを作り上げた。

状況を整理しようと思う。

召喚の儀式をどこかでミスしたらしく、逆に俺様が異世界に召喚されてしまった。さっき、口から火を吹く魚を殴り倒したので、少なくともここは地球ではない。

また、異常な戦闘能力を獲得したことも、間違いなさそうだ。たぶん、エリゴールとやらの力が俺様に宿ってしまったのだろう。

見た目からして、もともと戦いに適した悪魔なのは間違いなさそうだが、とりあえずシンプルな力の悪魔と合体したのはラッキーだった。よくわからんやつがよくわからん力よりは、よほどいい。

さしあたって、問題は。

「これからどうするか……だな」

それほどもとの世界に未練があるわけでもないが、やはり見知らぬ世界は何かと不安だ。類推できる情報には限度がある。

さっきの火を吹く魚のようなやつがいる以上、戦闘能力というのは間違いなく商売の資本になるはずだ。よって、金銭面はそれほど心配する必要もない。まあ、貨幣制度があり、人間が文明を築いていればの話だが。

技術の発展度合いや、文明の持つ独自性というものは、ある程度仕方がないとはいえ、とりあえず不安なのは言語だ。

言語が通じないと、行動を取るのは難しい。

もとの世界に帰る方法はいずれ探すことになるだろうが、生活は言葉なしで送れても、これは確実にコミュニケーションを要される。考えることが、多すぎた。

(頭おかしくなりそうだ)

イカれるくらい殴られたことはないはずだ。殴ったことはあるが。だから、俺様は正常なはずだが、状況の方が特殊すぎると、こっちも変になりそうだった。

とにかく、腹も減ったし町を探るか、と立ち上がる。

その瞬間、俺様の耳に金切り声が聞こえた。

「た、助け、助けてえーっ!!」

どうやら、異世界生活最大の懸念は、解決したようだった。

俺様が我ながら驚くほどの速さで参上すると、すでに現場は惨状だった。

死屍累々、鬼哭啾々。

よくファンタジーゲームなんかで並んでそうな騎士甲冑を纏ったオッサンたちが大量に倒れている。

アホみたいにでかい馬車からは、この集団のリーダーなのか、いかにも貴族といった服装のナイスガイが生首を覗かせていた。あ、ついでに馬の方も。

この場で明白に生きている魂は、俺様を除けば2つ。

ホームレスでも今時もつとマシな服装をしているんじゃないかってくらい貧相なボロ布を巻いた女の子。他に女はいないから、さっきの悲鳴はこいつだな。

彼女がブルブルと震えながら短剣を向けているのは、大きな化け物だった。

これから、彼女の華麗な一撃が、あの化け物を粉碎するー

(なんてわけ、ねえよなあ)

少女は、どう見ても戦いに精通した様子ではない。

いや、俺様だって精通はしていないが。

とりあえず、大義名分と戦闘能力があるのだ。動物殺しを楽しんでも、咎められるまい。

「おい、嬢ちゃん、そこどきな」

「えっ………?」

槍をくるりと回し、映画の見よう見まねで構えてみる。
体長6メートルはあるかという化け物は、ムカデとサソリをくっつけたかのような姿をしていた。

「死ねやコラア！！」

ジャンプ。

軽く跳んだだけなのに、悠々と樹木より高く舞い上がる。
化け物は、こちらに狙いを定めたらしく、大きな鋏を振るってきた。

あー、こりや壊滅して当然だな。普通の人間じゃかわせねえわ。
でも、俺様はついさっき普通の人間なんかじゃなくなった。
鋏を槍で受け止めると、腕の上を走り、根元まで辿り着く。
右腕を引っこ抜くと、化け物は苦悶の声を上げた。

……いや、お前口無いだろ。
ふざけた生物だ。万死に値する。
槍を、一閃。

化け物の甲羅が、あっさりと斬れる。
その隙間を狙い、槍を全力で突き刺した。

「またつまらぬものを斬ってしまった……」

いや、刺したんだけれども。

まあ、トドメの一撃であることに変わりはない。
よく、漫画で剣を振ると斬撃が飛ぶが、アレの刺突バージョンと
でも言うべきなのか、俺様の一撃は化け物の体内をも貫き、衝撃波
で後方の木々をも薙ぎ倒した。

「す、すいこ……」

喉の奥から絞り出したかのような声が、女の子の口から漏れる。

驚いているのはむしろ俺様の方だったが、それは押し隠して、俺様は腰の抜けた彼女を助け起こすのだった。

2・奴隷従属

奴隷とはまた、何ともそる響きである。

俺様が結果的に助けた女の子は、奴隷身分に属する人間らしく、はじめのうち俺様と話すのも恐る恐るといった調子だった。

「魔人？」

名は、メイル。奴隷に姓はないそうだ。

見た目だけなら、まあ可愛いんじゃないかと思う。紺色のセミロングの髪は、手入れさえすれば整った顔だちをさらに引き立てるだろう。体だって、栄養をしっかりと摂れば、年相応の少女らしいものになるはずだ。

生まれる場所さえ違っていれば、化粧も知らない中学校のガキどもの中では郡を抜いた可愛さから、人気者になっていたに違いない。

「はい……私たちは、魔人の進撃を止めるお手伝いのために、この森へ来ていたのです」

おどおどとした調子で、俺様に語るメイル。

ここは、例の惨劇の現場から、少し離れた場所。

生き残った僅かな兵をメイルが手当てし、野営地をメイルが設営し、今は俺様と二人で焚火を挟んでいるところである。

「いまいち、状況が掴めんな。俺様、遠い遠い国から来たから、魔人だの何だのはよくわからんだ。教える」

「ま、魔人っていうのは、とても強大な力を持った、恐ろしい存在です。その拳は山をも砕き、その魔力は枯れることなしと言われます。人間を食べることを快樂としており、自らの野望のためだけに生きる、傍若無人な……人類共通の敵です」

ふむ。

生憎、食人に興味はなくてもないが、俺様はフツーに料理食えれば食事はそれでいいからなあ。

友達にはなれそうにない。

「続ける」

「はい……く、クレイ様だったら、ひよ、ひよっとして、魔人にも勝っちゃうんじゃない……」

「さあな。んなことは知らんから、続ける」

「あう……すみません。魔人は、常に人間の敵ですが、大抵は生け贄として人間を捧げることで、その被害は最低限に抑えられています」

「でも、時折、欲望のために暴れる野郎もいると。で、今回は、そいつが食料を手にいれるためだか何だかは知らんが、攻めこんできたと」

俺様が言うと、メイルはこくこくと頷いた。

ま、そうだなあ。国の中枢部を力づくで抑えりゃ、食料である人間は簡単に集められるし。

が、俺様はそれが最善とは思わんね。俺様なら、力づくではなく、影から国を操る。

「そ、それで、我が国最強の騎士団、フリミアリッターが討伐の任に就くことになったのですが、生憎王都からは遠くて。それで、地方領主である御主人様とその私設部隊が、足止めのために、魔人の通過が予測されるこの森へと派遣されたのです」

「お前、戦えんのか？」

「むむむ、無理ですよ。私は、馬車を引いてきて、皆さまのお世話をしただけです、ほんとに」

だろうな。

戦えるようには到底見えん。

「っつーか、状況を見る限り、『ボス戦に挑もうとしたら中ボスにフルボッコにされた』ようにしか見えないんだが。」

「非戦闘要員のメイルはともかく、騎士までこんな雑魚なら、これまでどうやって魔人から身を守ってきたんだろうか。」

「勝てるのか？」

「え？」

「ナントカって騎士団はよ、魔人とやらに勝てるのか？」

「人間の中にも、強い人はいますから……一対一で勝つことはできないにしろ、数で圧せば多少はなんとかなります。今回は、やってくる魔人もまだ子供みたいですし。」

それから、メイルはつらつらと魔人について教えてくれた。

「どうも、魔人の襲撃を止めてくれる魔人もいるらしい。無論、対価は生け贄だけだな。国ごとやられるよりマシってわけだ。」

「要するに、魔人ってのは歩く災害だと俺様は理解する。なんとか人類は力を合わせてそれを乗りきってきたのだ。」

「それはそうと、お前。御主人様が死んでしまったけど、その場合、奴隷ってどうなるんだ？」

「奴隷は……奴隷ですから。逃げてもいずれ捕まるでしょうし、大人しく奴隷市場に行って新しい御主人様を探します。あ、でも、またあんなに痛いことされるくらいなら、ここで魔人にやられた方がマシかも……あはは」

「笑うような台詞ではないと思うのだが、確かにメイルは笑っていた。」

「こいつの境遇に同情するような俺様ではないが、見知らぬ貴族に

こいつが使役されるよりは、俺様の手で飼い慣らした方がいいのかなーって気はする。

異世界初心者の俺様には、ガイド役が必要なのだ。

その点、メイルはさっきの魔人の話を聞く限り、物事を説明する能力はありそうだし、何より奴隷身分ということで命令されることへの適性が高いから、うってつけだ。

ボディーガードは必要としないので、こいつは俺様のガイド役として十分な能力を有している。

「……メイル」

「は、はい。あ、ごはんですか？　ごめんなさい、さ、さっきの魔獣に食糧をかなりやられて、あんまり残ってないんです。こ、これだけ……」

「あ、うん。すまん」

出鼻をくじかれてしまった。

メイルの差し出した、林檍のようなものは、2つ。

満足な量とは到底言えんが、仕方ないか。

奴隷なら、多少我慢するだろと思つた俺様は、林檍もどきを2つともぶん取り、片方は槍で真つ二つに切つて、その半球のみをメイルに渡した。

俺様は、一個半。メイルの三倍だ。

しかし、メイルは、驚いたような表情で俺様を見た後、予想外の反応を試みせた。

「いいい、いいんですか、こここんなに頂いて」

「はあ？　なんだ、もつと少ない方がいいか？」

「いえ、ありがたく頂戴いたします……クレイ様は、優しい方なのですね。奴隷の私に、こんなにも優しく……」

優しい？ 俺様が？

いやいやいやいや、おかしいだろ。他人の給食を横取りして教師に怒られたことはあるが、まさか評価が上がるとは思わなかったぞ。普段はどんな生活送ってんだこいつ。

「私の御主人様が……こんな優しい人だったら良かったのに……」
「ーなってやろうか？」

メイルが漏らしたその言葉。
俺様にとっては渡りに船だった。

「えっ……？」
「だから。俺様が、お前の御主人様になってやろうかと訊いているんだ」

数秒間、メイルはぼかんとしていた。

口の中に何か突っ込まれるのを待っているようにしか見えない。
突っ込んでやろうかな。

しかし、実践に移す前に、メイルは大きな瞳からぼろぼろと涙を流し始めた。

「ひぐっ……う、あう……」

人語を発しろ。

「なんだ、泣くほど嫌か」

「ち、ちが……ふ、ふあ……嬉し、くて……あうう……っ」

なんかこいつ、ペットにしてえわ。

犬の頭を撫でるノリで、髪の毛をくしゃくしゃと押さえてやると、

メールの涙は三割増量した。

ーこうして。

この日、俺様は従順な奴隷を隷属させることに成功した。

2・奴隷従属（後書き）

魔人。魔神ではなく、魔人です。

主人公チート物といえば確かにそうなんですが、同レベルに強いのもいます。

3・フルボッコ

「ほ、ほんとにお一人で……？」

とか、不安げに言うマイルに、後からやって来るといふ騎士団と合流するよう言いつけた俺様は、翌朝ひとりで森の木の上に立っていた。

いや、立っていたというのは適切じゃないな。
浮かんでいた。

「我ながらすごいな……」

当然のように魔法という技術体系があるらしいのは、この際納得しておくとして。

飛行魔術、というものは、一応、俺様の特別な力ではなく、ちゃんと存在するらしい。

マイルは、風と無の複合属性である空属性がどーのこーのとほざいていたが、あいつ自身は魔法が使えるわけでもないのに、また魔法使いと知り合ったときに詳しい話を聞こうと思う。

何にせよ、飛べるのは嬉しい。

俺様は、魔人のガキがやってくるという方向を見つめながら、ぼんやりと魔法もどきを試していた。

風と無の複合属性とやらが使えるのなら、たぶん風は使えるだろう、とテキストに試してみたら、小さな竜巻程度なら起こせた。

しかし、無属性とやらの方は、いろいろ試してみても、何も発生しない。

(……あほマイルめ。魔法には詳しくないと素直に言えばいいものを)

どうも、自分は無属性とやらには縁がないらしい。
役に立とうと見栄を張ったメイが、間違った解説をしたようだ。
仕方ないから、他にありそうな属性を試してみるか、とため息を
つく俺様だが、その夕
イミングで前方から強烈な気配に襲われる。

「……………来たか」

唐突に、前方から炎の塊が迫る。
小手調べって感じらしく、噂の魔人の本気の一撃とは思えない。
とりあえず、槍でそれを払うと、炎は爆散し、一瞬だけ俺の視界
を埋め尽くした。

その一瞬を逃さず、炎を突き破って、小柄な影が突進してくる。
炎の目隠しで反応が遅れたが、なんとか対応できるスピード。
そいつの拳を槍の柄で受け止め、ようやくの対面となった。

「よおクソガキ」

「誰だか知らないけど……………僕の邪魔をする気？」
「その通りだ」

力任せに槍を振り抜くと、クソガキの体が吹き飛んでいく。
追撃。小さな竜巻を生み、それを叩きつけた。
しかし、それを呑み込むように、クソガキが落下したあたりから、
巨大な炎の蛇が現れる。

「うおっ……………」

大口を開けて迫る炎の蛇。

俺様は、槍をぐるぐると回すと、そこに風をまとわりつかせ、蛇
へと突き立てた。

すると、回転する衝撃波が蛇を貫いた。

「ーーククク。格の違いを教えてやるう」

振り向くことすらせず、俺様は槍を背後で構える。

不意討ちのつもりだったのだから、背中に攻撃しようとしていたクソガキの拳は、俺様の槍に阻まれた。

「クハハハハ！！」

体の奥から力が沸き上がる。

笑い方が変わってしまいうくらいに。

「こ、こいつ……っ！！」

振り向き様の回し蹴りから、槍での連撃。

雨のように注ぐ斬撃と刺突をさばくので手一杯らしいクソガキに、俺様は竜巻をぶつけてやった。

吹っ飛んで行くその体を追い、俺様も地面へ。

木々を突き破って着地したクソガキの眼前に、槍を突きつける。

俺様がトドメの一撃を放つ瞬間、クソガキはこんなことを言った。

「ど、どうしてーー同じ魔人なのに、僕の邪魔をーー」

騎士団に会うべく、とてとてと街道を走っていたメイルは、人生でも五指に入るほど驚いた。

突然、目の前に新御主人様が現れたからだ。

「きゃあああああつ!!」

「よおメイル」

「きゃーっ!!　　きゃーっ!!」

「メイ……」

「ひあああああああ!!」

「落ち着け」

新御主人様ことクレイに頭を撫でられ、メイルは顔を赤くしながら落ち着いた。

正直なところ、御主人様が本当に魔人に勝てるのかという不安はあった。

だが、杞憂だったらしい。

「ご、御主人様……よくご無事で。まさか、本当に魔人を倒しちゃうなんて」

蕩けるような心情で、メイルはクレイにすり寄る。

クレイの手では、魔人と思われる少年が、髪を掴まれてぐったりとしていた。

クレイは、一呼吸の間を空けた後、自信満々に言った。

「当然だ。どうやら俺様も、魔人らしいからな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2351ba/>

世界で一番、優しい魔人

2012年1月6日23時46分発行